

飛行無礙道

花 山 信 勝

一
釋尊の成道が佛教の基盤であり、成道とはいはゆる轉迷開悟を意味する。迷とは現實の人生に對する倒見を指し、悟とは理想とする佛陀正覺の意である。而してそれは淨土思想も展開することとなつた。四諦説も、十二因縁説も、ともに人生と正覺についての教である。八正道、六度、十度等の教説から、三歸、五戒にはじまる具足戒など、また戒定慧の三學等、これらはみな主として正覺への道程を教へたものである。

佛陀正覺についての考へ方の時代的相違と、人生における實踐修道の自己批判が、二千五百年の佛教史として展開した。第一には、人生と正覺との距離の遠近について、即ち衆生と佛との質的差異の問題である。即ち釋迦應身の考へ方から、壽量長遠の法身に至るまで。第二には、人生と正覺との相即一致について。即ち時間的遲速の問題である。第三には、現實的自我の反省と深察について。即ち頓漸、利鈍の機根の問題と、正像末の時に關する問題である。第四には、宗教の本質についての顧慮、いはゆる佛陀の慈悲の限度の問題である。即ち衆生の立場からすれば量と質の問題であり、慈悲攝護の範圍を男女老少智愚善惡の一切衆生にまで擴げるか否かの問題である。

二
我が日本佛教を一貫する本質的基盤は、（一）一乘、（二）常住法身、（三）速疾成佛にあるといつてよい。即ち一切衆生悉有佛性の立場に立つ平等成佛の主張と、十方遍滿壽量長遠佛の信仰、即ち毘盧舍那佛、阿彌陀佛、大日如來、久遠本佛等を本尊と仰ぐ佛教であり、即身成佛、即心是佛、現生不退入正定聚等を以て實踐面の基調とする。一切衆生平等成佛の量と、常住久遠の質と、速疾成佛の時を立場とする佛教である。是れらの意味を端的に表現した語が、飛行無礙道である。

此の現實界に於ても、一定の場所から目的地に到達するためには、陸道と水道と空道がある。又それぞれの道にも、歩行と腕車と汽車、水泳とボートと汽船、オートチャイロとグロブマスタールとジェット機などの相違によつて、遲速と大小の差がある。古來、佛教では車の兩輪、鳥の雙翼といふ語句を用ひてきたが、陸と空についての自然現象を人間の思索に應用した巧みな用語である。又、神通といふ考へ方も可なり古い。それは人間の理想の夢でもあつたわけだが、その中に神足通といふのがある。

印度の龍樹には、十住毘婆沙論の易行品に、如世間道、有難有レ易、……として、陸道の歩行は則ち苦しく、水道の乗船は則ち樂し、と喩へて菩薩の道に勤行精進のものと信方便易行のものとあることを説いたことは有名である。即ち陸道の歩行が難行道であり、水道の乗船が易行道であることと、難行道は無數劫の時間を要するのに易行道は速疾不退轉地を主張した教説として、支那及び日本に於ける易行道佛教の元祖と仰がれるのである。

我が聖德太子は、法華經及び勝鬘經の思想から一大乗を採用して

これを基盤とし、法華の壽量長遠佛を究竟法身と仰いで常住一體三寶を歸依し、その法身と自性清淨心との相即關係を勝鬘經に求められたが、速疾成佛の問題については未だ明瞭なものがなかつた。

次いで傳來した奈良佛教については、その全盛を極めた法相宗は、五姓各別の宗義に立ち、三大阿僧祇劫成佛を以て立場とした。しかしこれを批判して興つた華嚴宗が、一乘平等の宗義に立ち、初發心時便成正覺の速疾成佛を主張したことは、その後展開する日本佛教の實踐基調として注意を要する點である。

華嚴を佛教學の基本としてこれを學修し、平安の新佛教を打立てた最澄と空海とは、ともに一乘を以てその基盤とし、法華の久遠實成大牟尼尊と大日の大毗盧遮那自性法身とをそれぞれの本尊と仰ぎつつ、即身成佛を以て宗旨としたのである。天台法華宗には具に即入の義ありと主張して、一切衆生圓機凡夫の發心修行に即入正位を認めた最澄と、三密の加持入我我入による父母所生身の即身成佛を力説した空海とは、ともにその後展開する日本佛教の開導者となつたのである。

最澄は顯戒論の中に不定必定入印經を引文して、羊乘行、象乘行、月日神通乘行、聲聞神通乘行、如來神通乘行の五種菩薩を擧げ、前二乘行の菩薩は無上菩提を必定せずして無上智道を退くに對し、後三乘行の菩薩は無上菩提を必定して無上智道を退かずと説く。しかも前二乘行を陸行とし、後三乘行を空行とする。佛果不定の前二を無翼の劣菩薩とするに對し、佛果必定の後三を直道の菩薩として推稱する。これは我國にはじめて大乘の菩薩圓戒を打立てるがための主張であつた。

更に守護國界章の中には、權小、權大、實一乘の三はその道はる

かに別にして思議すること難しと説いて、その修行道に迂回と歷劫と直道の三道があり、したがつてその修行者にも迂回道を歩行する者、歷劫道を歩行する者、無礙道を飛行する者の三あることを主張してゐる。即ち無礙道を飛行する者は、直道を飛行するのであり、眞實一乘の成佛道は最も速疾にして易行であることを云はんとしたものである。しかもその結論に於て、歩行迂回道と歩行歷劫道の二歩行道は、教は有れども修する人は無しと斷じ、當今の人機は皆轉變してすべて小乘の機は無い、正法と像法とは稍過ぎ已りて末法はなほだ近きにあるから法華一乘の機こそは今正しく其の時であると説いて、法華一乘の時機相應の佛教を高調したものである。小乗や權大乘に説く種々なる禪定による成佛の時は已に過ぎたのであつて、四安樂行、三入着坐行、六牙白象觀、六根懺悔法、般若一行觀、般舟三昧行、方等眞言行、觀音六字句、遮那胎藏等の如き直道の經によつて修行し得道するものの現に數多いことを實證とした。

空海は十住心論の序に衆生の住宅に十處あることを示し、衆生は狂迷してその本宅を知らず、三趣に沈淪し四生に踰躰す、苦の源を知らず、本に還へる心無きため、聖父はこれを惑みてその歸路を示すとし、歸路に徑と紆、所乘に遲と速の別あることを説き、牛羊等の車は紆曲に逐うて徐々に進むから必ず三大無數劫を経るに對し、神通の寶輅は虚空を凌いで速かに飛ぶがため一生の間に必ず所詣に到ると説いた。更にその後文には、大日所乘の一體速疾の神通の寶輅を許して、灌頂の職位を授け即身成佛の眞言祕藏を受用せしむとなすものである。

我が日本佛教は此の飛行無礙道を更に一切衆生に開放したものと云ふことができよう。